

ブルターニュにおけるナシヨナリズムの誕生（三）

——『バルザズ・ブレイス』以前のラヴィルマルケ——

梁 川 英 俊

VII ブルターニュ像の変遷

一八二〇年代のブルターニュ像

さて、ラヴィルマルケがラリュ神父の著作に触発されてブルトン文学に関する研究を始めた一八三〇年代は、またフランスに新しいブルターニュ像が生まれようとしていた時代でもあった。つまりラヴィルマルケの野心とは、ある意味でそうした時代の趨勢に乗ったものだったのであり、けっして純粹に個人的な動機のみから発したものではなかった。しかしこうしたブルターニュをめぐる新しい動きについて触れるまえに、まずはここでそれ以前に流布されていたブルターニュ像に一瞥を投じておかなければならない。それはどのようなものだったのか。

すでに述べたように、革命後の行政調査に端を発する地方の習俗への関心は、ケルトにたいする関心の高まりと相俟って、ブルターニュにおいてはカンブリーの旅行記を生み、またケルト・アカデミーの設立を促しもした。こうしてブルターニュはケルトの地として人々の盛んな好奇心を惹きつける一方、またケルトマニアと呼ばれる人々の怪しげな言説を招き

寄せることにもなった。その後ケルト・アカデミーが解散し、一八二〇年代に入ると、ブルターニュに関する著作は数を増し、質的にも高まった。ジャンルも歴史、経済、文学、政治的パンフレット、考古学など多岐にわたった。が、そのなかで、広く大衆にたいしてブルターニュのイメージを決定づける役割を果たしたものとえば、それはやはり文学作品であった⁽¹⁾。

ブルターニュのイメージはまず「恐怖小説」とともに広がった。英国のラドクリフ夫人やウォルター・スコットなどが、スコットランドやアイルランドを背景に描いたこの文学ジャンルは、フランスでも少なからぬ模倣者を生み、一八二〇年代から三〇年代にかけて一時的な流行を見た。そして、その格好の舞台となったのがブルターニュだったのである。こうしてブルターニュには「予期せぬ出来事が起こる恐ろしい場所」という不気味なイメージが定着することになる。地形や気候風土の問題もあつたろうが、「ふくろう党」の記憶もどこかで影響していたのであろう。しかし、そうした小説で描かれるブルターニュはしばしば恣意的で正確さを欠いていた。

たとえば、当時流行した作家イッポリット・ボヌリエ Hippolyte Bonneier の『サン島の老女』*Les Vieilles femmes de l'île de Sein* (一八二六年) を見よう⁽²⁾。このウォルター・スコット風の小説は、一八二五年、著者がフランス地理協会から派遣されてサン島の調査に訪れたときの経験をもとに執筆されたものだったが、この島には情夫のいる女性に石を投げつける習慣があるのだの、フィニステール県の仕立屋はドルイドの継承者でギリシャ語から派生した特異な言語を話すのだのよそ現実とそぐわぬ奇妙な記述が目についた⁽³⁾。こうした記述の出典は大方がカンブリーの旅行記であつたが、この小説にかぎらず当時ブルターニュについて書かれた大衆向けの作品は、相変わらずそのほとんどがこの書物に依拠していたのである⁽⁴⁾。しかも、そうした作品がブルターニュに関するネガティブなイメージを広める上で果たした役割は、けっして小さくはなかつた。

ここで一八二九年に若きバルザックが発表した『ふくろう党』*Les Chouans* を紐解こう。ブルターニュの反革命的抵抗運動と共和国政府軍の戦いを軸に展開されるこの小説は、流行の恐怖小説の影響を随所にとどめながら、当時流布していたブルターニュにまつわる大衆的なイメージの一端を知らせてくれる。バルザックはまずこの地方をこう紹介する。

ブルターニュはフランス全体のうちで、ガリア人の習俗がもつとも深い痕跡を残している地方である。(……) だから彼らの生活は古代の信仰と迷信的な行いの名残を強くとどめている。ここでは封建時代の慣習がいまだに重んじられている。考古学者たちはそこになおドルイドの遺跡が立っているのを発見する。ここでは近代文明の恩恵も、広大な原始林の前に、怯えて浸透しかねているのである。(……) ブルターニュはヨーロッパの中央に位置しているため、カナダよりもはるかに興味深い観察対象となっている。文明の光に囲まれながら、その温かい恩恵にはあずかっていないこの地方は、あかあかと燃える炉のなかに埋もれ、黒いままでいる冷たい石炭に似ている。未知の宝を豊富に抱えたこのフランスの美しい地域を、社会生活と繁栄とに導こうとして、才能ある人がいくら努力をしてみても、太古以来変わらぬ風習にとらわれた住民たちの停滞のなかでは、どれもこれも、政府の試みでさえ、すべてが徒労に終わってしまうのである(60)。

すなわち、文明の光の届かない未開の地。これがバルザックが読者に提示したブルターニュだった。しかもその印象は登場人物のひとり、マルシユ・ア・テールの存在によってさらに増幅される。たとえば、このブルターニュの農民は徹底的に動物との比較で描かれる。その声は「このあたりの谷間に住む農民が羊の群れを集めるのに使う角笛」のようであり、頭は「牛の頭と同じくらい大きく」、目鼻立ちも「われらが美しきカフカス人種のものというよりは草食動物のそれに近

い」。のみならず、その長い髪もまた「雌山羊の毛皮の毛と似て」おり、腰から下を包むのは「この地方でビツクと呼ばれる雌山羊の毛皮」なのである。しかも、この獣が紛れもないブルトン人であることを、バルザックはつぎのような描写によってさらに印象づける。

彼は道端に静かに腰を下ろし、上っ張りから薄い黒ずんだソバ粉のガレットを何枚か取り出して、間抜けのように無頓着に食べはじめた。この食べ物はこの土地特有のもので、そのもの悲しい風味はブルトン人にしかわからないのである。この男には知性というものがひとかけらも備わっていないように思われたので、こうした状況のなかで士官たちは彼を、谷間の肥沃な牧草地で草を食んでいる動物の一匹に喩えたり、アメリカの未開人や喜望峰の土着民に喩えたりするのだった⁽⁶⁾。

ブルトン人が擬せられたのは動物ばかりではなかった。彼らはまた他の地域の未開人、とりわけ「北米インディアン」や「モヒカン族」とも比較され、「知的な面では北米のモヒカン族やインディアンに劣るが、偉大さ、狡猾さ、峻厳さにかけては彼らにひけをとらぬ人々⁽⁷⁾」だの、「モヒカン族が戦うのと同じ流儀で、神と王に仕える未開人⁽⁸⁾」だのと言われもした。当時流行していたアメリカ人作家フェニモア・クーパー *Fenimore Cooper* のインディアン小説を念頭においているらしい作者は、おそらくブルトン人を使ってそのフランス版をつくろうとでも意図していたのだろう⁽⁹⁾。いきおい現実のブルターニュは遠ざかり、オート・ブルターニュの東端フージェールとその近郊を舞台としながらその住人がブルトン語を話すなど、小説には不自然な点も多くあった。作者がわざわざ現地に足を運んだにもかかわらず、である。

一方、こうしたパリでつくられるブルターニュ像を、当のブルトン人はどう受け取っていたのだろうか。もちろん、彼

からも黙っていたわけではなかった。ここでひとつの雑誌の存在を強調しておこう。一八二三年にナントで創刊された月刊誌『リセ・アルモリカン』*Le Lycée armoricain*である。

わが声に立ち上がれ、アルモリカの息子たちよ！

汝らが古代の栄光の名残を集めよ。

祖国は言った。祖国を守る人々に従い、

闘技場に下り、勝者となって戻れ⁽¹⁰⁾。

こうした勇ましいことばで始まる「呼びかけ」を創刊号に掲載したこの雑誌は、王政復古期におけるブルターニュの唯一の総合的文化雑誌として一八三二年まで精力的に活動した。

主宰者の名はカミーユ・メリネ Camille Mellinet。ナントの市議会議員を務め、また土地の少なからぬ學術団体の会員でもあったこの人物は、また名うてのオルレアニストとしても知られていた。その彼が母方から受け継いだ出版社で刊行しようとしたのは、哲学、自然科学、文学、美術など、政治以外のすべてをテーマとする総合誌であった。実際、この雑誌に特定の政治色はなく、執筆者の顔ぶれも多様であった。しかしその大半はいわゆる名望家であり、また世代的にもほとんど同じであるという点で、彼らの間にはいわば社会的な共通性があった。

彼らは自らを「ブルトン人」と称し、パリの作家たちが時流の応ずるままにブルターニュにたいして生産し続けるイメージと、彼らの純粹に学問的な著作との間に厳しく一線を引こうとした。しかしこうした主張は、実際にはあまり有効なものとは言えなかった。というのも、『リセ・アルモリカン』に寄稿される民俗学的な仕事自体が、そもそも未開と文明と

いう構図に従ったものであり、しかも好んで未開な側面を強調するという点で、かつてのケルト・アカデミーのそれと似たり寄ったりなものだったからである。つまりその意図するところとは別に、実際にはこうした著作はパリにおけるブルターニュのステレオタイプなイメージの生産に一役買っていたのである。批判する側が批判される側の土俵を知らずに肯定するという、典型的な構図がここにはあった⁽¹¹⁾。

こうした構図に明らかに変化が起き、この地方にたいするポジティブなイメージが生成されるようになるのは、一八三〇年代に入ってからである。そのときブルターニュは、パリと相對するのではなく、むしろパリを経由することによって新たな表象を獲得しはじめるのである。

パリのブルトン人作家 — ブリズーとスーヴェストル

きつかけとなったのは、一八三二年に発表されたオーギュスト・ブリズー *Auguste Brizeux* の詩集『マリー』 *Marie* であつた。

ああ、マリーがやってくるとき、あるいは日曜日に、

晩課のとき、彼女の白いドレスが輝くのを見るとき、

亜麻のコワツフになかば顔を隠して、

教会の門口に彼女がやってくるとき、

私は喜んで永遠の聖処女を見ているのだと思ひもしたろう⁽¹²⁾。

この作品は七月革命の余韻が残るパリの読書界にセンセーションを巻き起こす。おそらく、コワツフを被った信仰心に篤い純朴な少女の姿は、革命で疲れた人々の心を慰藉するものであったに相違ない。

作者ブリズーは一八〇三年、ロリアンの生まれ。一八二四年に法律の勉強をすべくパリに出るが、ラマルチーヌやユゴーが活躍をはじめるロマン主義の雰囲気なかで、やがて法律を放棄して文学を志望するようになる。当初作者の名を冠さずに出たこの詩集は、故郷の一少女への憧憬を歌い、ブルターニュのイメージを「恐怖小説」の舞台から、懐かしい清らかな田園地帯へと大きく転回させることになった。マリーは一躍ブルターニュの新しい代名詞になったのである。

ところで、この詩集で歌われていたのは恋愛や田園風景だけではなかった。そこにはいまひとつの重要なテーマがあった。離郷と上京による故郷の発見という物語がそれである。つまり詩人Ⅱ語り手はブルターニュを離れて首都に移り住んだのち、望郷の念とともに新たに故郷に出会うのである。

この巨大なパリは、宿命的な騒乱を抱え、

休息も、穏やかな陽気さも、すべてがそこに呑み込まれてしまう

そしてひとはこの街を呪いつつ、そこから抜け出すことはできないのだ⁽¹³⁾。

(……)

今宵若者は悲しんでいる。都会は

まるで囚人のように彼を壁のなかに閉じ込める。

ただひとり、暖炉の前で、煙をあげる薪を見ながら、

彼は霧の立ち込める仄暗いアルヴォールを想う⁽¹⁴⁾。

詩人はパリに来ることによって、かつて顧みることもなかった故郷の風景を、描かれる価値のあるものとして再発見する。マリーとは都会の喧騒と憂鬱のなかで浮かび上がってくる、このブルターニュの象徴と言ってもよかった。ブリズーは言う。

ブルターニュについて正確な知識をもっている人はとても少ない。素朴な人たちの真価を知るためには彼らのなかで育ち、早くから彼らの言葉を話し、食卓をもにするとという経験が必要だ。そのとき彼らの秘められ隠されていた詩情が、その風俗の本来の魅力が姿を見せるのである⁽¹⁵⁾。

パリの作家が描く紋切り型のブルターニュではない、ブルトン人による真正のブルターニュが求められはじめていた。そしてその傾向を後押ししていたのは、エキゾチックな地方色を求めてやまないロマン主義の気運だったのである。

さて、こうした風潮のなか、いまひとりパリを経由してブルターニュに目覚めた作家がいた。『最後のブルトン人』*Les Derniers Bretons*の著者エミール・スーヴェストル *Emile Souvestre* である⁽¹⁶⁾。

一八〇六年、モルレーに生まれ、ブリズーより三歳年長であったスーヴェストルは、レンヌで法律を学んだのち、文学を志して一八二六年にパリに上る。そこで当時文壇に大きな影響力をもっていた同郷の劇作家アレクサンドル・デュヴァル *Alexandre Duval*⁽¹⁷⁾を頼って自作の戯曲を上演しようとするが、志かなわず、絶望した彼はついに文学への野心を捨て去る決意をする。そんななか心労で病に倒れた彼に、懐かしい故郷の風景が蘇る。

そのとき私の疲れた魂は昔の思い出に浸りはじめた。私はわが緑のブルターニュを本当に懐かしがりはじめていたの

だ⁽¹⁸⁾。

ある日、通りすがりに出くわしたブルターニュ行き馬車に飛び乗ったスーヴェストルは、そのまま逃げるようにパリを後にする。故郷に帰った彼を待っていたのは、見なれたはずの風景が発する新しい魅力であった。

ちょうど春先であった。ブルターニュは汚れない美しさで私の前に現れた。(……) 私はそれまでとりたてて注意して見たことのなかったこのブルターニュを賛嘆の念で見つめた。(……) 私はまるでひとりの女性を愛するかのようブルターニュを愛しはじめた。そしてその秘密、もつとも甘美でありながら知られること少ないその魅力をもつと知って欲しいと思った⁽¹⁹⁾。

こうして彼はブルターニュの調査に乗り出す。つごう六年にわたったこの仕事の間、スーヴェストルは数年をナントで過ごし、地元の書店の店員として働いた。ところでこの書店こそは、ほかならぬ『リセ・アルモリカン』の刊行元であるカミーユ・メリネの書店であった。スーヴェストルはこの雑誌に執筆者として名を連ねる一方、この書店から三冊の著書を出版したのである⁽²⁰⁾。

さて、のちに『最後のブルトン人』としてまとめられるスーヴェストルの仕事の成果は、批評家サント・ブーヴの紹介で、一八三三年九月から雑誌『両世界評論』*La Revue des Deux Mondes* に順次発表されていく。ブルターニュに関するはじめての信頼できる記述が、フランスでもっとも権威ある雑誌のひとつに掲載されたことは、パリのブルトン人の間で大きな話題となったに相違ない。ちなみにこの雑誌には、同年十一月一日にもブルターニュを主題としたミシユレの『タブ

ロー・ド・ラ・フランス』*Tableau de la France*の第一章が掲載されている。これまたブルトン人にとって慶賀すべき出来事であったに違いない。

翌一八三四年十二月一日、『両世界評論』はスーヴェストルの連載の三回目を掲載する。『ブルターニュの民衆詩』*Poésies populaires de la Bretagne*と題されたそれは、故郷の民衆によつて謡われている歌を仏語訳で紹介したものであった。もちろん、すでにパリに来てクルシー兄弟の屋根裏部屋に出入りしていたラヴィルマルケがそれに目を通さなかつたはずはない。しかも、その読書は間違いなく彼に大きな刺激を与えるものだった。

先に引いた彼のラリュ神父への手紙が、このスーヴェストルの論考が『両世界評論』に掲載された十日後に書かれていることが、なによりも雄弁にそれを物語っている。

VIII パリからブルターニュへ

ブルターニュにおける民衆歌の収集

さて、たしかにラヴィルマルケはスーヴェストルの論考から刺激を受けた。しかし、彼は民衆歌の収集というアイデアまでスーヴェストルからもらったわけではなかつた。というのも、ラヴィルマルケはすでにこの年の夏から故郷で収集をはじめているからである⁽²⁾。つまりスーヴェストルの論考は、やがて『バルザズ・ブレイス』として結実するラヴィルマルケの計画を加速させこそすれ、それに根本的な影響を与えるものではなかつた。しかも収集に関しては、彼にはすでに母親という身近な先例がいたのである。

もつとも、当時ブルターニュで民衆歌を収集していたのは、むしろ彼の母親のみではなかつた。カンブリーがオシアン

